# 緑爽会会報　No. 157

2018年8月27日発行
日本山岳会　緑爽会
発行人　富澤克禮

デザイン・制作　関塚貞亨

～～《報告》～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

## ７月例会「暑気払い」

開催日：７月２１日（土）　集会室
出席者：２３名（写真参照＝撮影小泉義彦）

暑気払いに相応しい猛暑の中、恒例のイベントが開催された。遠方からは田村さん、久しぶりの山川さん、新入会員の加藤さんご夫妻など２３名の出席。いつものように皆さんから沢山のお酒やお菓子など手土産を頂戴した。感謝。また、手料理も含めて田村さん、渡部さん、鳥橋さん、川口さんには一人一人に料理を盛り付けていただき、それらでテーブルは所狭しとの状況になった。

乾杯のちしばらく歓談し、皆さんから近況、思うこと等自由にお話しいただいた。思わぬ人と人のつながり、入会の経緯など初めて伺うことも多く、また皆さんの語りに笑いが絶えなかった。自然保護委員会との繋がりのある緑爽会ならではで、自分が関わってきた委員会での自然保護活動の話や、個人での自然保護活動、あるいは現在の鹿の駆除の問題などにつき談論風発。新たに入会された会員にとっては、改めて日本山岳会の同好会における緑爽会の独自性、その歴史、文化の重みに関して認識を深める機会となったものと思う。

緑爽会　暑気払い　*2018.7.21*

近藤雅幸　西谷隆亘　小清水敏昌　加藤真美　小林敏博　小原茂延　山川陽一　渡邊貞信　小泉義彦　加藤大雄
荒井正人　石塚嘉一　鳥橋祥子　渡部温子　川口章子　松本恒廣
富澤克禮　島田稔　田村佐喜子　川嶋新太郎　梨羽時春　瀬戸英隆　夏原寿一

～～《寄稿/投稿》～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

# 私が敬愛した長老たち

関塚　貞亨

５月１９日に「思いつくままに」と題してお話した内容を６月の緑爽会会報で紹介いただいた内容が申し訳ないが、欠席者に私の真意とは離れ誤解されかねないと思ったので、担当者からは「自叙伝」を注文されていたが、それは次回に譲り、改めて表題によって「山岳」の追悼欄と重複しないように、個人的に接触した長老たちについて感想を述べてみたい。

◎三田幸夫（1900 年～1991 年）

慶応大学山岳部ＯＢ(登高会)だけでなく、学閥を感じさせない人で山岳会の多くの人たちに敬愛されていた（日大ＯＢの金坂一郎談)。

大学を出てヒマラヤに近いインドの貿易会社千田商会に入社したが、最初の二年はシンガポール駐在で、二年後にようやく待望のインドに赴任、登高会に冬山用にアザラシの皮、バーバリーと同じ生地の防水布（ウインドヤッケ用)、寝袋の下に敷くための大量のコルクなどを送ると同時に、ヒマラヤの最新ニュースを知らせてきて、当時現役の学生だった谷口、金山らを奮い立たたせた。

１９５３年の第一次マナスル隊の隊長候補は松方さんだったが、都合が悪く行けなくなった。隊員はほとんど決まっていて、その隊員たちが希望する隊長は三田さんだった。そして残念ながら登頂は果たせなかったが、そのトレッキングから登攀紀行は三田さんが書き『山岳』第４９年、三田さんの著書「我が登高行」下巻に載っている。三田さんは一見茫洋とした人柄のように見えるが，読むと隊員一人ひとりへの気配り、観察力、登攀などの詳細など、その記憶力に感嘆する。ともかくこの紀行は勿論「我が登高行」は名著である。

１９６０年に三田さんは還暦を迎え、山岳会役員など当時の中堅有志がお祝いしようと相談して、佐藤久一朗さんが赤いセーターを編んで送ることになった．これがきっかけで還暦会が出来て、還暦の人は佐藤さんが編んだ赤いセーターを頂く集まりが生まれた。

山田二郎さんが登高会で不満が出ると三田さんのうちに押しかけて聞いてもらう。そして癒されて帰ってくる、と聞いたことがあるが、私も図書委員会の人たちからお呼びがあって、一緒に大勢で寺尾のお宅に押しかけ、奥様の手料理をご馳走になりながら、勝手なことを言い幸せな気分の一日を過ごした。

１９２５年のアルバータ遠征で、初期の英国エヴェレスト隊に加わっていたスイス人ガイドのハインリッヒ・フラーが加わった。そして三田さんとザイルを結び、ヒマラヤを語り合った。フラーとの交流は手紙のやり取りだが長く続いた。また三田さんの交流は山の人ばかりではなく、吉田茂首相の長男で随筆家の吉田健一とも交流があった。

１９２４年の英国エヴェレスト隊で遭難したマロリーをサポートしたオデールを西堀会長の時代に招いた。その時に三田さんが持っていた１９２４年エヴェレスト隊の記録フィルムをオデールに披露して彼を驚かした。そのフィルムは英国山岳会（ＡＣ）にもないということで、コピーしてＡＣに寄贈し、オリジナルは三田さんから山岳会に寄贈された。

◎中村てる（1904 年～2009 年）

天才で女傑、日本山岳会婦人名誉会員の中で婦人懇談会、女子会員に対してリーダーとして最もふさわしい活躍をした人と思っている。

北海道生まれだが、母方の曽祖父は秋田藩の家老、勘定奉行、祖父は剣術指南、父方は院内銀山の開祖の家柄で、頭脳明晰、体力抜群のＤＮＡを受け継いで、登山の達人となった。

父親も鉱山師で、テルさんは幼いうちから父とともに山を歩き、小学校四年になった時から家庭教師について英語を習い、卒業すると桜井女塾に進む。通常なら女学校三年修了して入学するところを優秀な英語力によって飛び級で入学した。同時にタイプ学校にも通い茶、花、謡、仕舞、習字のけいこも続けた。

桜井女塾を卒業するころ、父親が事業に失敗してテルさんは勤めに出て、一家を支えることになる。帝大出の初任給が３５円の頃、４０円で古河に就職，トラバーユを重ねて昭和の初め頃にフォード社に勤めて月給３５０円、婦人公論に日本一の高給取りの婦人と紹介されて評判となった。

東京ＹＷＣＡ有職婦人修養会の幹事をしていて、メンバー数人で夏の富士山に登り、富士の強力達がテルさんの登り方にほれ込んで、強力の第一人者だった梶房吉が「ぜひ冬の富士に登らせたい」と１９２６年（昭和元年）の大晦日に出発、翌年の元旦に登頂して、女子による冬の富士登山第一号となった。

さらに女性による初の冬に北アルプス縦走も記録しているが、装備は藁靴に三本爪のカナカンジキ、冬用の登山衣料などない時代だった。戦後も極東軍事裁判の同時通訳など、この分野でパイオニアとなる。登山では５６歳で隊長としてニュージ―ランド遠征，７５歳でネパールへ長期トレッキング、８４歳でインドヒマラヤ遠征隊アドバイザーとして参加など、高齢になっても活躍した。

私が中村さんの名を初めて聞いたのは、山岳会に入る３年前の１９７４年か７５年の上高地での噂話だった。その年に吉沢隊長、新貝登攀隊長によるＫ２登山が計画され、高齢の中村さんが隊員に応募して新貝登攀隊長らを驚かした。そして「テストとして穂高に登る」条件をつけた。そして若い頃は女子一番の鉄人も、高齢には勝てず残念ながら前穂高頂上直下で滑落して、骨折か捻挫で歩けなくなりヘリコプターが呼ばれたのだと思う。幸い穂高の小屋へ荷揚げするヘリがあって無事救出されたのだが、その費用として５０万円という高額を請求された。その金額に上高地の住人たちも驚いたのだろう、たまたま上高地に居合わせた私の耳にも聞こえた。勿論中村さんは支払ったであろうが、Ｋ２をはじめとするカラコルムの山々とバルトロ氷河に見参出来なかったことは残念なことであった。

◎西堀栄三郎と山田二郎

共通するのは器用なことで、西堀さんは二本マストのヨット（スクーナー）と呼ばれるもの、山田さんはモーターボートを自作していること。戦前のヒマラヤ最高峰ナンダ・デビーのティルマンが「ヒマラヤは煩くなった」と小型ヨットで大西洋をわたり、パタゴニア探検をしたことを連想する。

◎西堀榮三郎（1903 年～1989 年）

東京メトロ銀座線の赤坂見附駅から国会議事堂に向かって坂を上りきると左手に自民党本部のある砂防会館がある。その前に１９７０年代に海運会館が出来て７月２０日の「海の記念日」に海運造船業界の幹部と海運議員連盟所属の国会議員によるパーテイが開かれる。

そのパーテイに山岳会会長に就任したばかりの西堀さんが現れたので「会長、どうしてここに…」と尋ねると、「僕も船のオーナーや」と自作のスクーナーのことを話したが、本当はご自身が原子力エンジンを設計した原子力船「陸奥」の存続を陳情するためだった。

原子力船「陸奥」の船体は三菱重工。エンジンは石川島播磨が建造したが、処女航海でエンジンの放射線漏れで、原子力にナーバスとなっている日本人の神経質な心境によって、修理して航海を続けることが出来ずに母港の青森県陸奥に繋がれたまま、廃船が取り沙汰された時期である。

そこで議員連盟の事務局長であった船主協会の岩崎総務部長に紹介したが、残念ながら「陸奥」は廃船となり西堀会長の努力は報われなかった。

その後も交流が続き、特に植村直巳が冬のデナリ（当時はマッキンリー）で遭難したとき、山岳会の談話室で西堀会長も待機して消息を待っていたのだが、数々の冒険を無事に切り抜けてきた植村もついに帰らなかった。その時の西堀会長の「英雄の引退というのは難しいものだなー」と呟いた言葉を忘れることが出来ない。その後も山岳会のエースというような人々、加藤保男、小西政継、山田昇らの猛者が遭難したときその言葉を思い出す。

☆追記＝1985 年 9 月 28～29 日に山岳会創立 80 周年の富山支部との共催祝賀会が上市町「北アルプス文化会館」で開かれ、西堀さんが基調講演として「私の登山哲学」について話された。その内容は会報「山」485 号 5 ページに富山支部の石坂久志が書いている。参考にされたい。

◎山田二郎（1919 年～2014 年）

親しくお話したのは、１９８５年９月２８～２９日に富山支部と共催した山岳会創立８０周年祝賀晩餐会の帰りの信越線特急電車か、１０月１９～２０日に東海支部と共催した三重県湯の山温泉で開かれた第１１回自然保護全国集会の新幹線だったか定かではないが、隣に座らせていただき山の話、自然保護の話などの中で西堀さんのスクーナーの話題に及んだのだと思う。山田さんが「僕も山中湖に自作のモーターボートを持っている」と話され驚いた。

１９７６年に上高地で第1回自然保護全国集会が開かれて以来過去１０回の集会には担当理事以外山岳会執行部から理事ら役員が出席したことがなかった。湯の山温泉での全国集会は私が担当理事となって初めての集会だったが、初めて担当理事以外のしかも副会長の山田さんが出席された特筆すべき集会であった。

そして１９８９年１１月１７日、山田さんが今西会長の指名で山岳会会長に就任して半年後、会長として自然保護で目覚ましい成果を上げた日として特筆したい。

それは長野オリンピックの滑降コースとして、日本スキー連盟の会長で、西武グループのリーダーだった堤義明の提案で日本オリンピック委員会は志賀高原の岩菅山を候補と決定したことに対し、日本山岳会が反対したことに始まる。

志賀高原は横手山から焼額山まで殆どがスキー場として開発されていて、唯一岩菅山と隣接する

自然公園特別保護区の志賀山だけが開発をまぬかれた地域であった。しかも岩菅山山頂から南の方向には西武の三国、苗場スキー場が谷を隔てて連なっており、オリンピック終了後は岩菅山を西武のスキー場にする計画が危惧されていた。１９７２年の札幌オリンピック当時のブランデージ会長は自然保護に理解があり、恵庭岳の滑降コースは競技終了後に閉鎖され、自然の状態に戻されたが、後を継いだ会長は自然保護に無関心だった。

山岳会は岩菅山開発に反対する要望書を、文部大臣、環境庁長官、日本オリンピック協会に対して１１月１７日に提出した。今まで関係官庁への山岳会の要望は自然保護委員長と担当理事が手渡していたが、山田会長はこの要望書は重要と考えて監督官庁の文部省には自ら訪ね要望書を手交したのである。山田会長の指名で松田常務理事と関塚が同行した。

社団法人だった日本山岳会の管轄は文部省体育課で、応対も体育課長だった。相撲部出身と思われる体格のいい男で、山田会長に「閣議決定した課題に社団法人の山岳会が反対するのか」と場合によっては社団法人を取り消すぞと匂わせるような言葉で脅かした。山田会長は「李下に冠を正さず―という言葉がある」と岩菅山開発の背後に西武の商業主義があることを匂わせて反論した。体育課長も山田さんの発言の意味を理解したのだろう。無言で要望書を受け取った。同行した松田常務理事も私も、山田会長の応対に深い感銘を受けた。

新聞も閣議決定に山岳会が反対したと書き、地元の志賀高原関係者の反対もあって閣議決定が取り消されて、滑降コースは白馬の八方尾根になった。

その後も山田会長とは『山岳』第９３年の佐藤久一朗さんへの追悼特集記事の編集のお手伝いなど交流が続いた。また先輩の谷口現吉、１９５３年のマナスル隊での加藤喜一郎との交流などエピソードは多いが省く。

山田さんはモーターボートの自作など工作が趣味であったが、印象に残っているのは数年前に後輩の田辺壽さんが銀座のギャラリーで山の絵の個展を開いたときに、山田さんが厚紙を切り抜いて「槍ケ岳と穂高岳」の立体模型を作られて展示されたことが忘れられない。国土地理院の２万５千分の１地図の２００メートル等高線を厚紙にトレースして切り抜いた労作であった。

（今西壽雄・藤平正夫ほかの長老は次号で）

## 高山植物の保護活動から山に親しむ

樋口　みな子

日本山岳会に入ったきっかけは、１９９７年秋に起きた夕張岳の高山植物大量盗掘でした。危機感を持った全道各地の自然保護団体と山岳会の５０団体で、北海道高山植物盗掘防止ネットワークを結成しました。私は、日本山岳会の会員でもあり、さまざまな市民運動で長い付き合いがあった小野有五さん（当時、北大地球環境科学科教授）から声がかかって立ち上げに関わりました。日本山岳会北海道支部も加盟団体であったため、２００１年に JAC に入会しました。

大きな山行経験もありませんでしたが、自然保護委員長も４年間携わりました。２００２年から北海道から高山植物盗掘防止パトロールを JAC 北海道支部も受託しています。

以来、私もパトロールの一員として１６年間活動しています。

だんだん歳をとると山歩きも厳しくなってきますが、パトロールという目的があるおかげで、何とか３回は大雪山系の登山に行かなければと励みにもなっています。

今年６月にはニセコ山系など、比較的楽な山には登っていましたが、友人のお誘いで８月１８日、黒岳で高山植物のパトロールを行いました。なんと前日、１ヶ月も早い初雪が降り寒さ対策をしっかりして、朝４時半起きして友人らと大雪山系の黒岳に向かいました。

パトロール中の樋口さん

道内は長雨が続き、週末の晴の予想に、ロープウェイ前は登山を待ちかねていた人々や大雪山の自然を楽しみたいという観光客であふれていました。　７合目から登山開始しますが、登山道は最初から最後まで急で、滑りやすい大きな岩が露出していて緊張を強いられながら歩きます。８合目を過ぎたころからダイセツトリカブトや→ハハコグサ、ウメバチソウが多くなりだしました。やがて左手上に巨大なマネキ岩が見えてくると頂上が近い。風が強いので、合羽の上下を着こみました。でも頂上からは視界がなく、表大雪の山々が見えないのが残念でした。頂上から北鎮岳方向へ向かうなだらかな道の両脇の砂礫地帯は、夏の高山植物はごくわずかになっていました。秋を彩るミヤマアキノキリンソウの群落が素晴らしい。チングルマは枯れていますが、羽毛状になった群落も風情がありました。コマクサやイワブクロ、ウスユキトウヒレン、ヨツバシオガマが夏を惜しむようにわずかですが咲いていて、この日のパトロールを花々が見送ってくれました。

アキノキリンソウの群落

平和や人権を伝える「銀河通信」を発行して３０年になりました。それだけでは足りない。山を愛し自然を愛する気持ちも必ずどこかに入れていることも知ってほしいのです。（個人通信「銀河通信」主宰。写真も）

↓イワブクロ

↓ウスユキトウヒレン

↓　ヨツバシオガマ

# 追悼　羽賀克己さん

山口　節子

７月８日、羽賀克己さんが亡くなった。

私はニョーボの育子さんとは半世紀を超える山仲間で、姉妹のようなつき合いをしているが、克己さんの追悼を書く適任者ではないと思っているのに、緑爽会には彼を知る人が少ないのでぜひ書くように、との松本さんのご命令である。

克己さんはれっきとした「国家公務員」レインジャーである。私のスキー宿となっていた志賀高原、いっしょに初冬の西穂に登った上高地をはじめ、瀬戸内海、阿蘇、京都、日光､､､と、いくつもの国立公園で仕事をしている。

育子さんの方は、世の中にリサイクルの認識がない時代に厚生省に先がけて運動を始め、自宅の庭は空缶空瓶の山であった。（後に大臣から表彰されている）

電話をかけてダンナやムスメどもが出ると、「バタヤのお母さん、いる？」と訊く。すると「お母さ～ん、ワルグチさんから電話！」と呼びに行く。

レインジャーとしてどのように働いていたのか知る由もないが、現在のように〝自然保護〟が声高に叫ばれていなかった頃に夫婦でがんばっていたのは間違いない。

猿橋の、富士山の見える山の斜面に小さな土地を見つけて無農薬野菜を作っているが、数年前、枝下ろし中に梯子を踏みはずして斜面を転落、重傷を負った。それ以降健康上ついていなかった。ガンで胃を全摘した。何ともない、と強がっていたがダメージは大きかったに違いない。

読書家で本は山積み。〝狂歌”はいくらでも湧いてくる。やっぱり変人中の変人だ。
最後に、追悼を書かせるという、私にとって最悪の方法で仇討ちをして逝ってしまった。

＊会報１５６号に松本さんが「羽賀さんのこと」と題して寄稿くださいました。その会報をお送りしてわずか後に、逝去されました。ご冥福をお祈り申し上げます。羽賀さんの奥様と親しかった山口節子さんに追悼文を書いていただきました。（荒井）

～～《予告など》～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

**９月山行：富士山の東、三国峠からゆっくり歩いてフジアザミの咲くアザミ平付近で**
**ダイヤモンド富士観賞の山旅**

**日　時**：平成３０年９月２９日(土)日帰り

**集　合**：富士山駅改札口外集合１０‐時３０分（報告新宿８時１４分発、ホリデー快速富士山１号で八王子発８時５４分、高尾９時、富士山着１０時２６分）

１０時３５発のバス（ふじっ湖号）で三国峠ハイキングコース入口着１１時３０分

※駿河小山駅からタクシーで三国峠に直接来ることも可＝タクシー代 4000～5000 円。その場合は三国峠で１３時頃合流

（新宿発１０時４０分、小田急御殿場行き特急ふじさん３号で駿河小山１２時１１分着）

**コース**：富士山駅＝バス＝三国峠ハイキングコース入口―パノラマ台―（鉄砲木ノ頭＝登りたい人のみ）―三国峠―三国山―ブナ坂峠―楢木山―大洞山―（富士山への日没観賞）―アザミ平―篭坂峠(解散)

⇒１７時４３分篭坂峠発１８時２０分御殿場着のバス（乗れなかったら１８時８分発、１８時４０分着)、または１７時４８分篭坂峠発、１８時２２分富士山駅着のバス(乗れなかったら１８時１３分発、１８時４２分着）で家路に。

歩程約４時間３０分（三国峠からだと３時間４０分）

富士山麓の東に連なる緩やかな稜線を歩きます。ブナの緑、足元にはフジアザミが咲いているかもしれません。天気に恵まれればアザミ平付近から富士山頂に沈む夕陽を拝むことができます。下り（遊歩道のような道）は日没後になるのでヘッドランプは必ず持ってきてください。また、体力に自信のない方は三国峠からのコースで申し込むことをお勧めします。

担　当：近藤雅幸

参加される方は前日夜までにどのコースで来るかも含めて連絡をください。

ふじっ湖号　http://yamanashibus.com/fujikko

**１０月例会（講演）：**１０月２９日（月）　１８時～　１０４号室

**演題：「自然エネルギーに関わって３５年（現状の課題も含めて)」**

講師：前日本山岳会会長　森　武昭緑爽会会員

（日程お間違えのないように。なお当講演は会報「山」にも告知いたします）

１１月は山行を予定しています。

―名簿の充実に向けて―

引き続き「携帯番号」「(PC) メールアドレス」について、差し支えない範囲でお知らせください。

・連絡先：夏原寿一

--- **編集後記** ----------

６月３０日に梅雨が明けた東京。それだけでも異常でしたが、その後の酷暑、国内最高気温更新、かつてない台風進路、連日の台風発生、そして豪雨に災害と異常続き。この２ヶ月は身体も頭もおかしくなりそうでした。低山は熱中症の怖さがあるので、暑気払いの後、何度か３０００ｍクラスの高山へ行きましたが、下界に帰ると一層辛いのでした。

暑気払いの時の皆さんのお話を伺うと、将来、会の講演をお願いできる！という方が何人かおられました。もちろん会報に書いていただけるテーマも多いと思いました。渡部温子さんにお話しいただいたように、自然保護委員会の流れを汲む緑爽会に相応しい紙面づくりを心掛けてまいりますが、そのためには皆様のご協力が欠かせません。よろしくお願いいたします。

＜次号予告＞２０１８年１０月２５日発行の主な内容

報告：９月山行　　寄稿・投稿：関塚さん「私が敬愛した長老たち」第２回、小原さん「運命共同体」

＜皆様からの投稿をお待ちしています＞